Book reviews

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00053572

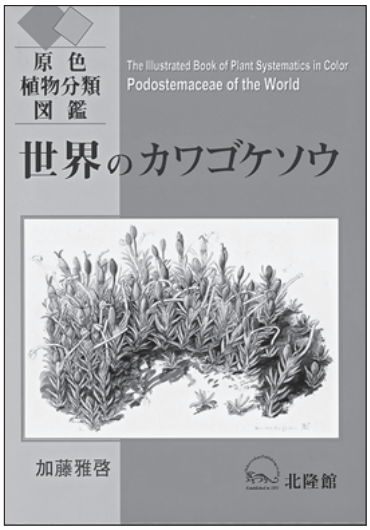
This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

新刊紹介

○清水建美（編・解説）・門田裕一（改訂版監修）・木原　浩（写真）：山溪ハンディ図鑑８　**増補改訂新版 高山に咲く花**　A５判変形, 512頁. 2014年４月15日. 山と溪谷社. 4,200円＋税.

2002年に発行された初版からの改訂は，掲載種が約700から750に増えた事，科の配列がDNA分類体系を反映した大場秀章編著「植物分類表」に変わった事，花の構造を示す花式が削除され代わりに分布図が加わった事などで，分類体系の変更に伴う写真の組み替えや解説文の変更以外は基本的に初版のままである。ただし改訂版監修者の専門であるアザミ属は全面改訂，トリカブト属も大幅改訂となった。分布図は47点あるが，シュロソウ属ではコバイケイソウ，バイケイソウ，ミヤマバイケイソウ，キンバイソウ属ではキンバイソウ，シナノキンバイソウ，ヒダカキンバイソウ，ボタンキンバイソウ，チシマノキンバイソウ，レブンキンバイソウというように，属内の近縁種をまとめて１つの地図に示しているため，分布域から推察される渡来経路や種間の関係，地理的分化などを視覚的に理解することができ，改訂版の真髄となっている。また，初版では巻頭にあった13ページに及ぶ「高山植物案内」の章（高山植物とは，高山植物の由来，高山植物と染色体数，分子系統地理へ，高山植物を守る）が巻末に移動し，改訂版監修者によるコラム「アルタイ山脈の高山植物」,「日本の高山のアザミ」,「ヒマラヤのトウヒレンとトウヒレン属の属内分類」,「フタナミソウの起源」が新しく加筆された。この結果総ページ数は496ページから512ページに増えたものの，紙質の変更で厚さは2.5cmから2cmへ，重量は約700gから600gへと軽量化され，まさにハンディ図鑑として高山に携える事が楽になった。（中田政司）

○加藤雅啓：**世界のカワゴケソウ**　B5版　308頁. 2013年９月20日. 北隆館. 20,000円（税別）



カワゴケソウ科は，「川苔草」という名前の通り，川に生え外見がコケに似る植物である。この植物は，世界の熱帯・亜熱帯の激流に分布している。しかし，日本では九州にある10余りの河川の早瀬にしか生育しておらず，普通のフィールド図鑑などには掲載されていないことが多い。そのため，非常に“マニアック”で馴染みのうすい植物と言える。早瀬の岩の表面に薄くコケのようにへばりついているので，よく注意していないと，仮に視界に入ってもそれだと気付かないかもしれない。それ程に地味な見た目の植物である。

しかし，カワゴケソウ科は研究対象として見ると，非常に魅力的で興味深い植物であることに気付く。コケのように見えるが実は被子植物であり，系統的にはオトギリソウ科と最も近縁である。また，カワゴケソウ科では，近縁な属であっても形態が非常に異なっていたり，逆に，同所的に生育する系統的に離れた属の形態が類似したりと，形態的な類似性と系統関係の不一致がよくある。何にも増して魅力的なのは，一般的な被子植物のボディプランから逸脱した形態形成過程だろう。古典形態学で言うところの器官の概念は通用せず，“器官の中身を混ぜ合わせる”など，想像を絶する形づくりが行われている。

本書は，世界初のカワゴケソウ科図鑑という点だけでなく，解説されている内容が分類に止まらない点で特筆すべきだろう。本書は，カワゴケソウ科が不思議たる所以を，分子発生学，比較発生学，分子系統学，系統地理学など，極めて多角的に解説しているのである。図示された写真は豊富で美しく，接写写真や組織切片の写真も多い。そのため，花などの細部についての外部形態や解剖学的特徴がとても分かりやすい。また，それぞれの種についての解説も詳しく，種属の検索表も添えられている。さらには，すべての項目に対照英訳文が付けられているため，カワゴケソウ業界の“jargon”を知るのにも役立つ。なお，概説にてカワゴケソウとは何たるかについて簡単に述べられているため，カワゴケソウの仲間について専門的な知識がない人でも安心して読むことができる。本書は，カワゴケソウ科のすべてについて知ることができる「図鑑を超えた図鑑」である。（上嶋智大）

○角野康郎：ネイチャーガイド　**日本の水草**　A5判，326頁．2014年9月30日．文一総合出版．3,500円＋税．

水草同定のバイブルとして調査に必携であった『日本水草図鑑』（以下，『図鑑』という）の発行から20年が経ち，その間に新しい分類群が記載され，分布や生態の新しい知見が蓄積された。在来水草の約40%が絶滅危惧という中で，アクアリウムプランツ由来の外来水草は逆にその種類と量を急増させている。分類体系も激変し，今や図鑑もAPG Ⅲに移行しつつある。そのような背景の中で，待望の新しい水草図鑑が出版された。

『図鑑』に比べてハンディなものを，というのが本書執筆動機のひとつであったと冒頭に述べられているが，実際にサイズで1/2，重量は『図鑑』の半分以下の約500gになっており，フィールドへの携帯が苦にならない。

掲載種類数は約280種。『図鑑』の約200種から大幅に増加し，日本産の水草は全て掲載された。イネ科，カヤツリグサ科が充実し，水生シダ類やコウホネ属などは最新の情報が反映され，野生化した外来種も網羅されている。科の配列はAPG Ⅲに基づいている。基本的なレイアウトは1頁1種で，カラー写真3～5点に解説文という構成である。写真は生態を写したものに，種の特徴を示す拡大写真や顕微鏡写真が使用され，検索表はないが，記載文と併せて同定ができるしくみである。しかしながら『図鑑』でもそうであったように，わかってない事や問題点はそのまま語られており，それが逆に水草に対する理解を深めることに繋がっている。本文最初に日本の水草についての総説が13ページにまとめられている他，トピックスとして，「オオアカウキクサ類の識別法」，「日本産コウホネ類の多様性」，「園芸スイレンの野生化」，「ヒルムシロ属の雑種」，「両生植物としてのホシクサ属」，「水辺のイネ科植物」，「沈水性コケ植物の世界」の7編のコラムがあり，研究の最前線にも触れることができる。分類学の面白さや醍醐味を語ってくれる本でもあり，水草に関心のない人にもぜひお勧めしたい。

（中田政司）